

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 6日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320066

研究課題名（和文） 語りの論理と語ることの倫理

研究課題名（英文） The Logic of Narratives and Their Ethics

研究代表者

菅原 克也（SUGAWARA KATSUYA）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30171135

研究成果の概要（和文）：本研究では、人間の体験、思い等が「語り」という形式を取る際にいかなる問題が生じ、これを考察するにあたっては、どのような研究アプローチを取るべきなのかという原理的な問題を考察するとともに、「語り」として立ち現れた文学テキストを、東アジアの歴史的、文化的、思想的文脈において具体的に検討した。それらは「経世の語り」「個人の語り」および「宗教的体験の語り」として分類され、それぞれその特質が明らかにされた。

研究成果の概要（英文）： Our research project addressed the issues of narrative form, in which various human experiences has been accumulated entailing their individual interpretative perspectives. It also addressed the issue of how the literary narratives should be approached and what theoretical frames be applied to them, taking into account historical, cultural, and philosophical contexts in East Asia. Some literary texts were discussed and categorized into “political narrative,” “personal narrative,” and “religious narrative,” with their elucidated characteristics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,500,000円	1,350,000円	5,850,000円
2010年度	4,000,000円	1,200,000円	5,200,000円
2011年度	4,100,000円	1,230,000円	5,330,000円
年度			
年度			
総計	12,600,000円	5,130,000円	16,380,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：比較文学

1. 研究開始当初の背景

（1）年来の欧米での研究の進展が著しい、語りの研究 Narrative Studies に対応する、日本における研究がやや手薄であるという意識から、欧米の語りの研究（Narrative Studies, Narrative Theory, Narratology 等）の直接的な紹介におわることのない、日本語という言葉と、日本を取り巻く東アジアの言語、及びその文学伝統にしっかりと根ざした

「語りの理論」の構築が求められた。

（2）語りの研究 Narrative Studies は、「語り」を文学テキストのみに限定されない、人間の社会的活動の全領域のなかで考察する傾向を持つに至っている。その点こそが、1980年代において一応の完成を見たかに見えた「物語論 Narratology」と、現在の語りの理論を区別するものであり、認知科学等の進展に刺激を受けた Narrative Theory を

包括しての、語りの研究 **Narrative Studies** の興隆をもたらしたものである。本研究も、その点を踏まえ、まずは言語的事象として考察できる語りの「論理」と、語りの社会的意味を問う「倫理」の両面から探ろうと考えた。これは、近年のポスト・コロニアリズムの研究に刺激された日本及び東アジアの文学の読み直し、最終的には語りの「倫理」の問題に帰着する部分を有するという見通しを得たことにもとづく。

(3) 分担者である宮本久雄は、すでに金泰昌氏との共編で「シリーズ物語論」三巻(東大出版会)を出版していたが、そこでの成果を生かす形で、「語る」という行為の文法、論理、そして「語る」場において意識される他者との共生空間と、その倫理性を、語りのテキストを東アジアに限定して追求しようと考えた。

(4) 本研究は、一部の研究者によって研究が進められていながら、日本の文学研究において、必ずしもその成果が共有されているとは言い難い **Narrative Studies** を、日本および東アジアの文脈で再考し、欧米の **Narrative Studies** と日本の文学研究との架橋を試み、語るという行為の倫理性にまで踏み込んで研究することを志した。

2. 研究の目的

「語ること」あるいは「語り」の論理について、近年の欧米の **Narrative Studies**、**Narrative Theory** 等の成果を参照しつつ、日本及び東アジア固有の「語り」の場を意識しつつ、理論的な考察を行うとともに、これを「経世の語り」と「個人的体験の語り」という二つの側面から、その特質をあきらかにすることを本研究の目的とした。日本及び東アジアには、漢文脈の伝統を受け継いだ語りの文法と論理があり、それらが、近代における多くの苦難に満ちた歴史背景のなかで、「経世の語り」と「個人的体験の語り」の両面において、発現してきたと考えられる。その点を、具体的な資料、とくに文学作品の検討を通じて検討した。

3. 研究の方法

本研究では「語り」の論理についての理論化の作業と、「語ること」の倫理に関する歴史的、思想的考察を行ったが、これを具体的な例に即して展開するために「経世の語り」と「個人的体験の語り」という二つの側面を強く意識しつつ研究を行った。また、日本および東アジアにおける「語り」を考察する上で、言語的、地域的な区分も必要となった。そこで、研究代表者、研究分担者、及び連携研究者で、以下のように研究の分担を行った。

[テーマ的区分]

総括：菅原克也

語りの論理と「経世の語り」：斎藤希史、井上健、徳盛誠

語りの倫理と「個人の語り」：宮本久雄、李建志

[地域的区分]

総括：菅原克也

日本：宮本久雄、井上健、徳盛誠

中国：斎藤希史

韓国：李建志

以上のような大まかな区分を立てつつも、研究代表者を中心に、研究会を組織し、内外の研究者を招聘しての講演会、シンポジウム等を行い、「語り」の研究に関する研究の重要性を訴え、日本における「語り」の研究の一中心を構築することをめざした。そのために、まずは大学院生をも加えた **Narrative Studies** に関する勉強会を立ち上げた。また、これまで交流の実績を積んできた、台湾大学、韓国外国語大学校との学術交流を維持・継続しつつ、「語り」に関する共同研究を推進した。さらに、東アジアの文脈での「語り」の理論の構築を、欧米の物語分析の研究の場に組み込むことをめざし、国際比較文学会 (ICLA) での活動を、研究成果の交流を行うための重要なチャンネルとして生かした。

4. 研究成果

(1) 具体的な研究成果は、「5. 主な発表論文等」の通りであるが、韓国外国語大学と台湾大学との継続的な学術交流が維持できたことは、本研究の国際的視野を確保する上で重要であった。また、研究者分担者宮本久雄の研究により、当初考えていた東アジアの歴史的経験と語りという境域を超えた、ユダヤ・キリスト教的な伝統と、ヨーロッパ近代の苦難の語りについての研究を進め得たのは大きな成果であった。

(2) 地域的な歴史的固有性に根ざした研究がいつかの重要な成果を上げたのに比して、東アジアの伝統を意識した「語り」に関する理論的な研究は、当初の見込みほど進展させ得なかった。これは、一般的な理論を構築する作業そのものの困難さと、理論的な研究を推進するにあたっての共同研究の困難さ自覚を促すかたちになった。これは今後の研究の課題となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

- ① 菅原克也、語ることの意味、共生学、査読無、3、2010、94-110
- ② SUGAWARA Katsuya, Metrics Bound and Unbound, Year Book of Comparative and General Literature, 査読, 2010, 73-89

- ③ 宮本久雄、和解と共生への荊棘的道行き、共生学、査読無、1、2009、1-32
- ④ MIYAMOTO Hisao, La Naissance de l'Éhiyehlogie: Au-delà de la pensée bouddhique et de l'ontothéologie, 査読, 227, 2009, 78-91
- ⑤ 宮本久雄、現代文明と仏教思想の彼方、査読有、カトリック研究所論集、15、2010、1-27
- ⑥ 宮本久雄、現代において証し・証言するということ、共生学、査読無、4、2010、41-109
- ⑦ 宮本久雄、善きサマリア人の譬えの地平、査読無、危機と霊性、1、2011、151-180
- ⑧ 井上健、ポー、谷崎潤一郎、そしてリラダン、査読有、ポー研究、2/3、2011、56-65
- ⑨ 井上健、異郷の幻影と表現の革新—昭和作家の朝鮮と満州、査読有、日本研究、韓国外国語大学校、50、85-101
- ⑩ 斎藤希史、Burns 訳『天路歷程』の伝播と変容、査読無、超域文化科学紀要、東京大学、14、2009、123-140
- ⑪ 斎藤希史、<同文>のポリティックス、査読有、文学、岩波書店 10・6、2009、38-48
- ⑫ 斎藤希史、「悠然」の時空—陶淵明にいたるまで、査読無、未名、神戸大学、28、2010、1-22
- ⑬ 斎藤希史、『虞美人草』—修辞の彼方、査読無、叙説、奈良女子大、38、2011、96-109
- ⑭ 徳盛誠、筆談としての学問論・詩論—1748年の朝鮮通信使来訪、査読無、国際研究集会報告書第29集、国際日本文化研究センター、2011、223-237

〔単行本論文〕(計11件)

- ① 井上健、日本文学とポー、八木俊雄・巽孝之編、エドガー・アラン・ポーの世紀、研究社、2009、54-77
- ② 井上健、外国語と母語との対話—谷崎潤一郎、佐藤春夫の翻訳、翻訳文学総合事典第五巻、日本における翻訳文学、大空社、2009、3-26
- ③ 井上健、翻訳文学の位相—英米文学解説、山本武利・川崎賢子・十重田裕一・宗像和重編、占領期雑誌資料体系・文学編Ⅴ、占領期文学の多面性、岩波書店、2010、251-276
- ④ 井上健、英書「文学及小説」について、浅岡邦雄・鈴木貞美編、明治期「新式貸本屋」目録の研究、作品社、2010、152-160
- ⑤ 斎藤希史、近代訓読体と東アジア、沈国威・内田慶市編、近代東アジアにおける文体の変遷、白帝社、2010、109-119

- ⑥ 斎藤希史、読誦のこぼれ—雅言としての訓読、中村春作・市来津由彦・田尻祐一郎・前田勉編、続「訓読」論、勉誠出版、2010、15-46
- ⑦ 斎藤希史、和習と仮名—漢字圏における文字と言語、東京大学国文・漢文学会編、古典日本語の世界「二」—文字とこぼれのダイナミックス、東京大学出版会、2011、3-30
- ⑧ TOKUMORI Makoto, Reading Commercial Societies: Kaiho Seiryu and Bernard Mandeville, The University of Tokyo Center for Philosophy, Whither Japanese Philosophy? III: Reflections through Other Eyes (UTCP Booklet 19), 2011, 41-54
- ⑨ 徳盛誠、日本書紀「神代」試論—イザナキ・イザナミによる構成と保障、査読有、思想、岩波書店、1043、2011、76-99
- ⑩ 徳盛誠、清原宣賢『日本書記抄』試論—『日本書記纂疏』との関連から、新川登亀男・早川万年編、史料としての『日本書記』—津田左右吉を読みなおす、勉誠出版、2011、297-321
- ⑪ 徳盛誠、石田梅岩のダイナミズム—海保青陵との比較から、片岡龍・金泰昌編、石田梅岩：公共商道の志を実践した町人教育者（公共する人間2）、東京大学出版会、2011、61-77

〔学会発表〕(計19件)

- ① 菅原克也、日本を見る目を意識する—戦後日本の文学を例に、日韓共同シンポジウム「日本を見る視点」、東京大学、2009
- ② 菅原克也、語ることの意味、「いのちと共生の語り」シンポジウム、上智大学、2009
- ③ 菅原克也、陰画としての日本—佐藤春夫の台湾紀行から、日台交流シンポジウム「日本を見る視線」、東京大学、2011
- ④ 菅原克也、韓国を語る話形、国際学術研究集会「韓日の相互認識」、韓国外国語大学、2011
- ⑤ 宮本久雄、ヘブライ的ペルソナ論、京都フォーラム、神戸ポートピアホテル、2011
- ⑥ 李建志、解放前に於ける李光洙小説の日本語翻訳—李壽昌と波田野節子の「無情」の翻訳比較、国際比較文学会第19回大会、韓国中央大学校、2010
- ⑦ 李建志、李王の和歌、日本比較文学会第46回関西大会、京都産業大学、2010
- ⑧ 李建志、下関という<境界>を語る、コリアンディアスポラの記憶を手繰る、東京大学、2012
- ⑨ 斎藤希史、漢字圏としての東アジア、国際シンポジウム「東アジアの地域交流」、台湾中央研究院、2009

- ⑩ 斎藤希史、近代訓読体と東アジア、ICIS 第 4 回研究集会「近代東アジアにおける文体の変遷」、関西大学、2009
- ⑪ 斎藤希史、景観の日本—志賀重昂『日本風景論』から、日台交流シンポジウム「日本を見る視線」、東京大学、2011
- ⑫ 斎藤希史、仮名と和習—漢字圏のエクリチュールとして、第 23 回日本研究コロキアム、韓国・高麗大学、2011
- ⑬ 斎藤希史、「支那学」の誕生—考証の学と文化の学、UTCP ワークショップ「伝統学術の再編と国家意識」、米国・コロンビア大学、2011
- ⑭ 斎藤希史、景観の修辭—志賀重昂『日本風景論』から、日本研究所シンポジウム「東アジアにおける漢文と近代」、韓国・壇国大学、2011
- ⑮ TOKUMORI Makoto, The Problematic of the East Asian Classical World, The Cultural Foundations of the East Asian Classical World1, UCLA, 2009
- ⑯ TOKUMORI Makoto, Writing on Commercial Society: KAIHO Seiryō's Intellectual Method, 18 世紀科研国際研究集会「知の原理／方法」、東京大学、2009
- ⑰ 徳盛誠、石田梅岩のダイナミズム—海保青陵との比較から、第 97 回公共哲学京都フォーラム、大阪リーガホテル、2010
- ⑱ TOKUMORI Makoto, Changing Consciousness of Shared Classical World: Through History of Interpretation of Nihon Shoki, The 19th Congress of the International Comparative Literature Association, 中央大学校 in Seoul, 2010
- ⑲ 徳盛誠、東アジア古典学とテキスト分析の深化の可能性—古事記冒頭部と書記基盤、科研研究会「東アジア古典学のために—実践的深化をめざして」、東京大学、2010

[図書] (計 9 件)

- ① 菅原克也、講談社、英語と日本語のあいだ、2011、244
- ② 宮本久雄、創文社、旅人の脱在論、2011、346
- ③ 宮本久雄、東京大学出版会、ヘブライ的脱在論—アウシュヴィッツから他者との共生へ、2011、255
- ④ 宮本久雄、日本キリスト教団、他者の風来、2012、271
- ⑤ 李建志、弦書房、松田優作と七人の作家たち、2011、270
- ⑥ 井上健、ランダムハウスジャパン、文豪の翻訳力—現代日本の作家翻訳、2011、431

- ⑦ 井上健、思文閣出版、翻訳文学の視界—近現代日本文化の変容と翻訳、2012、291
- ⑧ 斎藤希史、羽鳥書店、漢文スタイル、2010、296
- ⑨ 品田悦一、斎藤希史、東京大学 GCOE 共生のための国際哲学教育研究センター、近代日本の国学と漢学—東京大学古典講習科をめぐって (UTCP Booklet 24)、2012

[産業財産権]
○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/profs/index.html>

http://www.sophia.ac.jp/jpn/program/UG/UG_Theo/UG_Theo_theology

http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/s_sociology_001181.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅原克也 (SUGAWARA KATSUYA)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：3 0 1 7 1 1 3 5

(2) 研究分担者

宮本久雄 (MIYAMOTO HISAO)
上智大学・神学部・教授
研究者番号：5 0 1 5 7 6 8 2
李建志 (LEE KENJI)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：7 0 3 2 9 9 7 8

(3)連携研究者

井上健 (INOUE KEN)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30121867

斎藤希史 (SITO MARESHI)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80235077

徳盛誠 (TOKUMORI MAKOTO)

東京大学・大学院総合文化研究科・講師

研究者番号：00272469